

## 集団保育における哺乳についての検討

佐々木聰子\*・小野明美\*・井桁容子\*・黒住佳代子\*・巷野悟郎\*\*

(平成2年9月28日受理)

### A Study of Milk Feeding in Nursery Room

Satoko SASAKI, Akemi ONO, Yoko IGETA, Kayoko KUROZUMI and Goro KOHNO

(Received September 28, 1990)

#### I はじめに

生後間もない乳児が、自分で生きる為にまず行う動作が乳を飲むことである。しかし新生児は吸う力も弱く吸い方もうまくないので、母親はその乳児に合うように抱き方や乳首の含ませ方など工夫し、努力する。このように哺乳行為は乳児と母親との共同作業により成り立つ。空腹感を満たされた乳児は心地よく眠り、最も安定した時を過ごす。乳児の欲求にもとづく働きかけに適切に応答することによりお互いの信頼関係の基礎が築かれていくわけである。近年、産休明けの保育を行う施設が増え、生後2ヶ月に満たない乳児の集団保育が行われることが多くなったが、この頃の乳児の生活にとっては、安定した睡眠と心地よい授乳が基本である。そこでまず、哺乳行為が「乳児と母親の共同作業による」という視点から、集団保育における哺乳の様子を観察し、保育者が母親に代って、乳児の立場にたった心地よい授乳を行っているかを検討した。

#### II 方法及び対象

東京家政大学児童学科・ナースリー・ルーム(産休明けから3歳未満児定員14名の保育研究施設)に在室した次の条件の乳児42名(男児23名, 女児19名)を対象とした。

- 産休明け, もしくは離乳食開始前に入室した乳児。
- 昭和52年以降に入室し, 現在の保育者が直接入室時から接している乳児。
- 記録が整っている乳児。

上記の対象乳児について, ①保育開始から一週間の乳児の哺乳の状況と問題点, ②その後, 1歳までの哺乳の

\* ナースリールーム \*\* 同室長

状況と問題点, の2点から検討した。尚, 授乳は窓際にソファを置いて落ちついて飲めるような環境になるように配慮した。

#### III 結果及び考察

##### 1. 入室時の状況と問題点

42名の乳児を保育開始から7日間の哺乳の適応状況によって3群に分けた。分け方に関しては表1に示したとおりである。入室前は家庭に於て一定の環境, 一定の授乳者に馴れ親しんでいたのだが, 入室することにより環境も変わり授乳者も変わるので, ある程度の不適応状態を示すのが当然であると考えた。(表1)

表I 入室時の状況による分類

I 群 (26名)	適応状況良 (ほとんど問題なし)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○家庭と同じように飲む</li> <li>○少し哺乳量が減少したり, 吸い始めに時間がかかったりするが飲む。</li> </ul>
II 群 (13名)	適応状況普通 (少し問題あり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○最初は激しく泣いて飲まなかったが3~4日から1週間位で落ちついて飲めるようになる。</li> </ul>
III 群 (3名)	適応出来ない (問題あり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○1週間を経過しても馴れることができない。</li> <li>○哺乳量が少なく, 保育室での哺乳のペースが出来ず機嫌に影響する。</li> </ul>

① I群の乳児についての検討

I群の乳児について栄養法の変化をみると表2のようになる。入室時すでに人工栄養になっていた者は月齢が3ヶ月以上が10人中8名である。混合栄養の11名については逆に3ヶ月未満児が9名で、特に1ヶ月児が6名含まれる。これらの乳児は家庭ですでにミルクの味や哺乳びん、乳首の感触になじんでおり、混合栄養から人工栄養になった乳児の場合も月齢が低く、大体の味がわかると言われる3ヶ月未満であるためと思われる。又、自律授乳が確立しない時期であることも影響を与えている。母乳から人工栄養に変わっても問題なく適応できた乳児は3名共、1ヶ月半から2ヶ月になったばかりで、月齢が低い上に吸う力が強く、1回の授乳で十分に母乳を飲み従って授乳間隔もある程度あき、ほぼ規則的に授乳されていた。(事例I, 事例II)しかし事例IIIとしてあげたH. O. 児の様に月齢が低くても周囲の様子や授乳する者の違いを感じ、しばらくの間保育者と乳児との相互の働きかけが必要である。

表2 栄養法の変化

	入室前	→ 入室後	人数
I群 (26名)	人工	人工	10名
	混合	人工	11
	混合	混合	2
	母乳	人工	3
II群 (13名)	人工	人工	6
	混合	人工	4
	混合	混合	1
	母乳	混合	2
III群 (3名)	母乳	混合	2
	混合	人工	1

注: 入室後…保育室において、家庭では異なる場合もある。

事例I K. S. 1ヶ月30日で入室 母乳→人工  
吸い始め少し変な顔をするが全量飲む、吸う力が強く母乳が規則的であり3~4時間間隔で1日6回位である。

事例II K. K. 2ヶ月6日で入室 母乳→人工  
差異に気づいて、いったん乳首を出すイヤな顔をして飲まない。空腹の時は勢いよく飲む。

事例III H. O. 1ヶ月17日で入室 混合→混合  
3~4回乳首を吸っては休んで保母の顔をみたりする。順調に吸い始めるまで5分位かかる。

② II群の乳児についての検討

II群の乳児について栄養法の変化をみると表2の様になる。入室時すでにミルクに馴れているにもかかわらず適応までに3~4日かかった乳児をみると、月齢が3ヶ月を過ぎている者が多く、家庭でもミルクのみになっていた6名の内5名が、3ヶ月から4ヶ月時の入室であった。このくらいの月齢になると環境の変化をはっきり感じ、R. A. 児のように馴れない保育者からの授乳を拒否したのだと思われる。

事例IV R. A. 3ヶ月7日で入室 人工→人工  
お腹がすいている様子なのに、抱いて飲ませようとすると激しく泣いて飲まない。なだめるように抱いて歩くと泣きが弱まるのでそのままイスにすわり乳首を含ませると又泣きだす。抱いて歩いたままミルクを飲ませると、少し泣いていたがやがて飲み始める。調子よく飲み続けるようになってからそっとイスにすわる。

月齢が低くてもなかなか適応できなかった乳児をみると、

- 家庭において今まで母乳の方が主になっていたため、哺乳びんの乳首やミルクの味に馴れていない。
- 母親が授乳に来ることがあるので乳児にとって切りかえがスムーズにできない。(学内の職員の場合は希望により連絡して来てもらう。)
- 生理的不快感に敏感である。
- 環境の変化による不安が強い。
- 家庭において、泣くと与えるという不規則授乳であった。(空腹以外の不快感で泣いても乳首が与えられる)等の状況がみられ、保育室での哺乳に適応することがむずかしかったと考えられる。しかし、II群の13名については前記のような問題はあったが一週間以内にはほぼ落ちついて授乳できるようになった。

③ III群の乳児についての検討

適応が難しかったⅢ群の乳児3名については以下のとおりである。

事例Ⅴ N. K. 5ヶ月17日で入室 母乳→混合  
入室が5ヶ月を過ぎており、家庭では母乳栄養であったうえ、母親が学内の職員であり母乳も飲ませられるという気持ちから乳首にもミルクにもなじんでいなかった。しかし実際には仕事の都合でほとんど授乳にこられず、一週間を過ぎてても哺乳びんを見るとイヤがって飲まず哺乳量は10～20mlであった。離乳食に切りかえたが栄養が満たされないことから午睡も短かく、機嫌も悪かった。保育室での生活にだいたい馴れたと思われる1ヶ月経過後でもミルクは20ml～40mlであった。家庭でも満1歳まで母乳を飲んでいたりするなど栄養に関する問題が続いた。

事例Ⅵ K. A. 3ヶ月10日で入室 母乳→混合  
母親が不在の時は搾乳して飲ませることもあったがあまり馴れておらず、70～80ml位であった。入室時は保育者の顔を見て泣く。あやすより姿をかくして静かに見守る方が落ちつく状態だった。乳首を含ませると怒って泣きだす。保育者だと飲まないのでも親に来てもらい飲ませてもらう。少し吸ってイヤな顔をし乳首を出したが促されて又飲み始めた。次の日も保育者だと怒って泣くので母親に来てもらう。しかし、少し飲んだ後乳首をはなして体をそり返して怒って泣く。母親が何度かあやしながら与えてみるが飲まない。母乳を与えるとよく飲み機嫌よくなる。しばらくの間母親が来て、ミルクを与えたり母乳を与えたりする。母親が昼間授乳に来られなくなってからも80ml位が約1ヶ月続くようになり、その後160ml位飲むこともあったが飲まない時もありむらが多かった。

事例Ⅶ K. Y. 3ヶ月22日で入室 混合→人工  
家庭では母乳のみの時と母乳にミルクを足す時とあった。入室時周囲が静かだと落ちついて過ごせたが、乳首を含ませると泣き出す。抱き方を工夫したり家庭で使用している乳首にしたりするが怒って泣いてしまう。母親が来て飲ませると飲む。6日目になっ

てベッドに寝たままなら飲むようになる。保育者に抱かれて落ちついて飲むようになるには2週間を要した。しかしK. Y. の場合馴れてからは順調で5ヶ月まで家庭では混合栄養、保育室では人工栄養で過ごした。

以上の3例の事例で共通して言えることは、①入室時の月齢が3ヶ月を過ぎている。②入室時まで家庭では母乳が主になっていて特に始めの2例では乳首に馴れていなかった。③入室後も母乳を飲んでい、である。適応の状況が普通であったⅡ群の、混合→人工、混合→混合、母乳→混合の7名について比較してみると、①入室時の月齢は1～2ヶ月が多い。(1例のみ3ヶ月)②時々母乳を搾乳して飲んだりミルクを飲んだりすることがあった。③入室によって保育室では人工栄養に切り変わった。(混合の3名については2名が4ヶ月に入って人工に切り替え、残り1名が5ヶ月に入って切り替えとなっている。)

以上の点から適応が難しい原因としては、月齢の問題、乳首に対する馴れの問題、入室後の栄養法の問題が考えられる。しかしⅡ群に分けられた乳児でも一応は飲めるようになったものの、哺乳量が少なかったり、乳首になじまず吸い始めるまで手間どったり、完全に空腹になるまで時間をあけないと飲まない。哺乳量が少いので離乳食を早目に与える等、個々の乳児に応じた、保育者のそれぞれの対応が必要であった。我々は母乳を飲ませることの大切さを知りそれを保障することと同時に、母親の就労による乳児の集団保育をよりよい形で実現したいと願っている訳であるが、それには乳児を環境に適応し変化していく存在としてとらえ、その成長を長い目でみていくことと、1人ひとりの乳児の環境や個人差に合せた対応が欠かせないように思われる。

## 2. 保育室における1歳までの授乳の状況と問題点

保育室における1歳までの授乳の状況と問題点を、個人の日誌及び記録から抜粋し、各年齢によってまとめ、その月齢に多い状況について検討し問題の特徴と思われることを表3の右側にまとめた。これらの結果を、文献等による乳を飲む能力の発達とてらし合せて考察する。

1ヶ月では母乳の分泌は安定し乳児の飲み方も強くなってくる。しかしまだ反射的に飲んでおり拒否能力がないので飲み過ぎてしまうことがある。この月齢の乳児は家庭では母乳が中心になっていて、入室によって乳首が

表3 1歳までの授乳の状況と問題点

月齢	多い状況（記述より）	問題の特徴
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・すぐに吸いつかず舌でおしだす。</li> <li>・乳首が適当でないか、むせる。</li> <li>・吸う力が弱く時間がかかりミルクの温度が低下する。</li> <li>・疲れて眠ってしまう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ミルクの飲み方がまだ未熟である為。</li> <li>・乳児と保育者との間の相互の気持ちが合っていない。</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・飲み始めにイヤな顔をする。泣きそうになりなかなか飲めない。</li> <li>・空腹で泣いているのか他の不快感で泣いているのかわからない。</li> <li>・授乳の途中で眠ってしまう。</li> <li>・飲んだ後も、睡眠が浅く泣きが多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・乳首やミルクに慣れていない。</li> <li>・授乳のリズムが確立していない。</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育者の顔をじっと見る。</li> <li>・しばらく口の中で乳首を動かしている。</li> <li>・哺乳びん、乳首を拒否し母乳をさがす。</li> <li>・しばらく静かに飲んでいたが、身をよじらせ周囲を見廻して泣き出す。</li> <li>・ダラダラ飲む。</li> <li>・一気に飲んで出が悪いと怒る。</li> <li>・授乳の回数が減る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・哺乳時の環境、授乳する人や周囲の雰囲気の影響される。</li> <li>・睡眠のリズムとの問題</li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人の気配に気をとられて落ち着きがなくなる。</li> <li>・哺乳量が少なくなったり、ムラがあったりする。</li> <li>・授乳の回数が減る。</li> <li>・母乳栄養児（家庭で）はミルクを嫌がり飲まなくなることがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人差や家庭での過ごし方による問題がでてくる。</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・離乳食は意欲的に食べるがミルクはあまり飲まない。</li> <li>・離乳食後のミルクの量が急に少なくなる。</li> <li>・母乳の分泌が少なくなる。</li> <li>・母乳栄養児（家庭で）は哺乳びんを見ただけで嫌そうな顔をして飲まずに泣く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・離乳食とミルクの問題。</li> <li>・初期離乳食は量的には十分ではないにもかかわらずミルクへの関心が薄らぎ、体重の増加量の減少がみられる。</li> <li>・母乳からミルクへの移行の問題。</li> </ul>
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ミルクより離乳食がよくなり食後のミルクの飲み方が少なくなる。</li> <li>・体をつばったりそり返ったりして遊びながら飲む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ミルクに対する意欲がなくなる。</li> <li>・2回食へ移行。</li> </ul>
7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・離乳食後のミルクもよく飲むようになる。</li> <li>・離乳食の途中で眠くなり、怒って泣きだしミルクを飲みながら眠ってしまう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・離乳食と睡眠の生活リズムの問題。</li> </ul>
8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食欲旺盛、よく食べよく飲む。</li> <li>・家庭では落ち着いてコンスタントに飲むが、保育室ではムラがある。</li> <li>・保育室では飲むが家庭では飲まない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・7～9ヶ月にかけて、家庭と保育室との差がみられる。</li> <li>・個人差が明瞭になってくる。</li> </ul>
9 10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・離乳食後のミルクは少ししか飲まなくなる。</li> <li>・好みが出てくる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3回食へ移行。</li> </ul>

1990. 5. 19 ナースリールーム

変わるとうまく飲む事ができない。母の乳首と哺乳びんのゴムの乳首とは吸啜の運動が全く違うといわれる。母乳の場合は咬合圧が主になり、哺乳びんの場合は吸引圧が主になる。又母乳でも母親の分泌には個人差がある。従ってまだ飲み方が未熟でやっと母親の乳首に馴れたばかりの乳児にとっては、嚥下が追いつかずむせたり、吸うことに疲れて眠ってしまったりする。保育者の抱き方やあやし方も母親のそれとは微妙に違うと思われる。従って保育者は乳児の様子をみながら、抱き方を変えたり乳首を変えたり調節したりして少しでも乳児が心地よく授乳出来るように工夫する。

2ヶ月になると大体授乳のリズムが安定し、3～4時間間隔になる。自律哺乳の能力が発達してくるとともに舌で乳首を押し出すようになる。又、味覚や感覚・情緒の分化発達に伴い、多少の刺激で飲みが少なくなったりする。つまり哺乳のしかたが少しずつ反射的ではなくなる訳である。この時期入室によって環境が変わったり2つの異なった環境におかれる乳児は、乳首の違いや味の違いを感じて飲まなくなったり（飲めないのではなく）イヤな顔をしたり乳首を口に含んだままで様子を伺ったりする。又、2つの環境を移動することによって睡眠や授乳など生活のリズムの確立が多少遅れ、授乳の途中で眠ってしまったり十分に飲んでいない為に睡眠が浅くなるという悪循環を起こすことがある。十分眠って空腹で目ざめ授乳により満たされて機嫌よく遊ぶ…という生活リズムが確立するようにまず基本的に十分な睡眠を保障することが大切であると思われる。

3ヶ月になると、自律哺乳能力が安定してくるので、多少の刺激を受けながらも飲めるようになる。授乳は大体4時間間隔になって昼と夜のリズムがついてくる。そして夜中の授乳が1回ぬけるようになってくる。この頃の保育室での授乳の状況としては、抱かれて乳首を含みながらもさかんに周囲の様子を伺い模索するようになる。授乳者の顔をたしかめたり、含まされた乳首の感触をたしかめ拒否し母乳をさがしたりする。空腹の為思わず飲み始めても途中で“やっぱり嫌だ”というように怒って泣きだしたりする。食欲が旺盛で家庭と保育室との生活のリズムがうまくいっている場合は安定して飲む。昼夜のリズムに関しては集団保育の場合、昼間の刺激が家庭よりは多いので昼間の眠りは浅くその分夜ぐっすり眠ることから早目につく場合が多いようである。

4ヶ月になると、味覚や感覚・情緒の発達によって個

人差や家庭での養育方法による差がでてくる。これらの状況は未熟さとか生理的な発達途上の問題としてとらえるより1人1人の差違としてとらえた方がしっくりいく。昼間の睡眠が十分とれず、夕方から夜半にかけてぐっすり眠り、授乳回数が少なくなり体重の増加量に影響する場合もある。又、家庭で母乳を飲んでいる乳児の場合は味覚の発達からミルクを嫌がり飲まなくなってくる。

5ヶ月に入ると離乳食が始まるので離乳食とミルクの問題がでてくる。このことは離乳食開始によるストレスといわれ普通は一週間位でおさまるといわれているが、保育室の場合はこれをきっかけにして離乳食以外の時のミルクにも関心がうすらいだり母乳を飲んでいた乳児についてはさらにミルク嫌いに拍車がかかったりする。その上、そろそろ母乳の分泌が少なくなり母乳からミルクへのきりかえの問題も起ってくると乳児にとってはストレスがかさなることになる。この時期の混合栄養児のミルク嫌いがはっきり表われた事例をあげておく。(表4)この事例のように保育者と母親の協力により早目に対処すれば、事態をあまり複雑にすることなく乗り切っていくことができる。

6ヶ月になると離乳食も順調になり食後のミルクの量は少なく余裕がでて遊びながら飲むようになる。これは発達の上からも自然な姿であり2回食へと移行を進めていく。むしろこの時期に離乳食の嚥下がうまくいかずミルクの方を好んで求めてしまう乳児の場合が問題になる。

7ヶ月になると活動が活発になってくるため食欲も出てきて離乳食後のミルクもよく飲むようになる場合が多い。この月齢は、登園時間と午前中の睡眠、離乳食の一回目の時間が午前中に集中するので、各個人の家庭での生活リズムに合わせて調節しながら午前寝の生活リズムを整え、機嫌良い状態で離乳食が食べられ授乳ができるように配慮する必要がある。

8ヶ月になるとますます食欲は旺盛になり離乳食や授乳も安定してくるが、乳児自身が2つの環境それぞれに適応する力が強まる為か家庭と保育室での差がみられる場合がある。これも発達途上の1つの姿としてとらえられるのではないと思われる。

9～10ヶ月になると離乳食も3回食へと移行してくる。食事の量もふえてくるので当然ミルクの量は減少する。牛乳に代わるのもこの時期である。栄養も主として食事の方に移ってくるので授乳に関しては特に神経質になることはないが、この頃になると今まで与えられていた食

表4 事例：ミルクを嫌がるようになる混合栄養児（5ヶ月） その1

月日	生活の様子	授乳の回数・量		授乳の様子
		保育室	家庭	
○月2日	満5ヶ月になる	① M 160 ml ② 母乳	母乳4回	母乳の方がよく飲むが空腹だとMも普通に飲む。
3		① M 160 ② 母乳	母乳4回	目ざめて直後はMを与えても飲まない、少したってから飲む。
4	腹這いでよく動く	① 母乳 ② M 160 ③ 母乳	母乳2回	すぐ吸わず、少しの間乳首をしゃぶっている。その内に飲み始める。
5		① M 180	母乳4回	
6	休日	——	母乳のみ	野菜スープのおかゆ、ピシャピシャとよるこんで食べる。母乳は少し足りない感じがする。
7		① 母乳 ② M 110 ③ 母乳	母乳2回	飲み始めは普通、途中から遊びながら飲む。
8		① M 120 20分 後に100	母乳4回	Mを意欲的に飲まない、少し飲んで乳首をなめている。授乳後不満が残る機嫌が悪い、20分後に100 ml飲む。
9	欠席	——	母乳4回 離乳食少々	離乳食は意欲的に食べる。
10	離乳食開始	① 離乳食+ M 160 ② 母乳	母乳2回	乳首をMにする。
11		① 離乳食+ M 140	母乳?回	離乳食は器を見ただけでニコニコする。Mは魅力がいらず遊びながら飲む。
12		① M 180	離乳食 母乳?回	Mの飲み始めに少し遊び、飲みだすとリズムカルに全量飲みそのまま入眠する。
13	休日	——	離乳食 母乳6回	
14		① 離乳食+ M 150 ② 母乳	母乳2回	離乳食は嬉しそうに食べるがMはなかなか飲もうとしない。イヤイヤ飲み始める。飲み始めると一気に飲むが一段落つくともう飲まない。
15	欠席	——	離乳食 母乳6回	少し母乳が不足してきたようで乳首を離すとき囁んだりする。
16	体重増加1日19g	① 離乳食+ M 180 ② 母乳	母乳3回	Mを吸い始めるまで機嫌をとって気を紛らわす。
17		① 離乳食+ M 160	母乳?回	Mを途中で飲まなくなったのでスプーンで与えたところニコニコして飲む

集団保育における哺乳についての検討

その2

月日	生活の様子	授乳の回数・量		授乳の様子
		保育室	家庭	
○月18日	ミルク拒否	① 離乳食+ M飲まず ② M飲まず、その後2回与えてみるが飲まず	母乳2回	Mは飲もうとしない、空腹になってから与えてみるが舌で押し出してしまう。ほとんど乳首をなめているだけ。
19		① M飲まず	離乳食 母乳4回 M2回 60, 50	自分で哺乳びんに手をそえ、口へ入れてみるが泣いてしまって飲めない。 午後家で母乳がMを与えると、やっと少し飲む。 (保育室で昼間、Mを全く飲めないと困るので家でも時々Mを与え、乳首の感触を忘れないようにして欲しいとたのむ)
20	休日	—————	夜中 母乳 ① M 100 ② 搾乳 120 ③ 搾乳 50 ④ } 母乳 ⑤ }	Mはイヤイヤながら飲む。 乳首がイヤな様子でなかなか吸おうとしなかったが次第に馴れてくる。
21		① M 150 離乳食 ② M 150	M 180 M 150 母乳1回	吸いつきは悪いが保育室でも又、元の様にMを飲むようになる。十分飲み満足したので機嫌がよい。 家でのM、夜中は一気に吸いつく。
22	離乳食が3品位となり量も増える	① 離乳食+ M 160 ② M 180	搾乳1回 M 2回	
23		—————	搾乳1回 離乳食 M4回 (180×3) (200×1)	
24		① 離乳食+ M 130 ② M 180	母乳2回 M 1回	離乳食の中に食べづらいものがあったらしく泣いてしまう。

その後の状況：

- 離乳食は意的に食べる。
- 時々ミルクを嫌がって飲まないことがある。
- 眠い時はかえってミルクをよく飲み、飲みながら眠ってしまう。
- 6ヶ月頃から母乳を飲まなくなる。
- 早目に2回食となり、6ヶ月半頃から3回食へ移行する。

以上の様にミルク嫌いのきざしは少しずつ表われ、やがてはっきり拒否をする。この月齢では味覚も乳首の感触もはっきり意識して拒否するので少し機嫌をなおして与えてみても飲まない。どうしても家庭の協力が必要になる。この事例では一番信頼関係にある母親が上手になだめながらミルクを与えてくれたので乗り越えることができた。

事のステレオタイプが形成されて新しい味や食べ物になじみにくくなるので牛乳も含めて多くの食品や献立に馴染めるようにしたい。いわゆる好みも出てくるがそれ程固定されたものではなく、調理法や雰囲気によって食べたりする。

#### IV おわりに

以上2つの観点から集団保育における哺乳の状況を検討したが、乳児の家庭での過ごし方や栄養法、月齢によって1人ひとり異なり、適応の過程や発達の状況にも個人差があることが理解された。集団保育という体制をとっていてもその中で、保育者が日々一人ひとりの乳児の様子をよく観察し、飲み方のくせや好みを発達や個人差に応じて理解していくことが大切となる。一時的なミルク嫌いや食欲不振にもその都度状況に応じてうまく対処して、問題をこじらせることなく、哺乳に関しては少なくとも一年間という幅をもって観ていくことが必要である。特に産休明けの乳児ができるだけ母乳が飲めるように保障し、しかも離乳食が完了するまでの一年間のあいだ、なるべくストレスを少なくしながらミルク、離乳食、牛乳へと移行できるように保育者として研究努力をかさねたいと思う。

付記

本研究の要旨は平成元年度日本保育学会第43回大会(松山東雲短期大学)で発表した。

#### 参 考 文 献

- 1) 山内逸郎：新生児，岩波新書，1986
- 2) 山本高治郎：母乳，岩波新書，1989
- 3) 荒井 良：胎児の環境としての母体，岩波新書，1989
- 4) 小林 登：こどもは未来である，メディサイエンス社，1988
- 5) 北 郁子：乳児の発達と栄養・食習慣，さ・さ・ら書房，1980
- 6) 二木 武：赤ちゃんの栄養と離乳食，婦人生活社，1985
- 7) 巷野悟郎：おかあさんといっしょ「離乳食」，女子栄養大学出版部，1987
- 8) 巷野悟郎：小児科相談室，同文書院，1982
- 9) 巷野悟郎：パパとママの安心育児読本，主婦と生活社，1983